

総合的な探究の時間

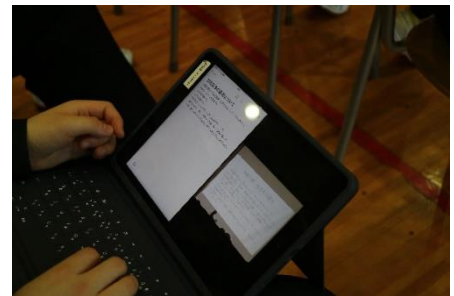
「立佞武多」講演会 対象：2学年・3学年普通科生徒全員 令和6年5月15日（火）



5月15日（火）7校時に第1体育館で、立佞武多の館館長佐々木基一氏をお招きして講演会を行いました。「立佞武多の変遷について」というテーマで講演をしていただきました。古い資料を基に復元した経緯や本校卒業生や多くの方々に支えられて、現在の祭りになっていることを学びました。「立佞武多の館」が改修工事のため、来年4月から休館するので、注目されてきた現在までの流れを途切れさせないように工夫することが大切だと仰っていました。また大型客船の就航などで海外のお客様が増えているので、語学力のある若い人たちの力が必要とされていることがわかりました。

【立佞武多の歴史について知ったこと、学んだこと】

- ・地域の出来事と絡み合って年々進化してきた。
- ・「立佞武多」の名称は、平成の復活の際に名付けられた。
- ・明治時代は今よりも大きく、技術面で今よりも劣っている中でどうやって作っていたのか。
- ・「喧嘩ねぶた」という由来を聞き、陰しく怖い表情や生首、幽霊という恐ろしい絵と繋がった。
- ・明治中期から大正初期に五所川原は津軽の豊かな農林水産資源の中継地として大いに栄えていた。
- ・昔は石を投げたり、火をつけた松明を投げ合って喧嘩していた。



【高欄制作の心構えや運行の意義】

- ・本州最北端に位置し、夏の短い青森では、特に大切な行事だから、地域ごとに独自性を帯びて発展してきた伝統をしっかりと受けつぐ。
- ・五所川原の一大イベントと言っても過言ではないから、経済活動にもいかすべきだ。
- ・人が街を作り、街が人を作る。
- ・真夏日の運行になるから、熱中症対策や安全面での配慮が必要だ。
- ・高欄は、1番鮮やかで個性が出る部分であると思っているので、それぞれのねぶたの1番個性が出る絵柄や色合いで丁寧に描いていくことが大切だ。



【立佞武多の今後】

- ・時代の影響を受けて変化消滅する可能性があるものを継承発展させていくためには、現状や歴史、経緯を十分に把握し、目的にあった最適な記録を作成する。
- ・もっと海外に目を向けて、YouTubeやTikTokを活用して発信する。そして英語を話せる人材を増やす。学生が外国人に説明してもよいと思う。



- 大正2年に電灯が設置されたことで、ねぶたが低くなったので、伝統の継承と世の中の利便性との両立を図る。
- 制作者の人材育成が課題だ。人材は一朝一夕には育たないのだから、積極的に情報を発信していくことが有効だ。
- 経済発展だけでなく、地元の誇れる文化にするために、今以上にグローバル化するべきだ。

